

震災俳句から見る風景の捉え方に関する考察

松田 楓¹・星野 裕司²・増山 晃太³

¹正会員 株式会社オオバ
(〒810-0074福岡県福岡市中央区大手門1丁目1番12号大手門パインビル)
E-mail: kae_matsuda@k-ohba.co.jp

²正会員 熊本大学准教授 くまもと水循環・減災研究教育センター
(〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪2丁目39番1号)
Email: hoshino@kumamoto-u.ac.jp

³正会員 熊本大学学術研究院 くまもと水循環・減災研究教育センター (同上)
Email: masuyama@kumamoto-u.ac.jp

熊本地震発生後、復旧・復興事業がおこなわれることで、被災各地は急激に変化している。まちレベルで震災を捉えることも必要だが、個人が震災をどのように捉えられているのかを把握することもまた重要である。以上をふまえて本研究は、震災をとおして人々がどのように風景を捉えているのかを考察することを目的とする。そこで、「H28熊本地震震災万葉集」に掲載されている震災俳句を対象に、俳句に含まれる季節を用いて俳句をグループに分類し、個人レベルで風景をどのように捉えているかを考察した。その結果、地震の状況や経験を記録したり、対比や投影表現を用いることで風景を捉えたりしていることが把握された。

キーワード: 俳句, 風景, 震災, 復興

1. はじめに

(1) 背景と目的

平成28年4月14日及び16日に熊本地方を震源として「平成28年熊本地震」が発生した。この地震は最大震度7を2度も観測し、人身並びに家屋等に壊滅的な被害を与えた。現在発災からおよそ4年半が経過し、復旧・復興事業が同時多発的におこなわれることで、被災各地のまちは劇的に変化している。復興事業においては地域やまちレベルで広く捉えなければ、効率的かつ効果的に進めることができないが、一方でこのような急激な変化が起こる時だからこそ、個人レベルにおいて震災というものがどのように捉えられているのかに注目し、考えることも重要であるといえる。個人レベルにおける震災の捉え方を把握することは、個人が震災に対してどのような感情を持っているのか、何を大事にしているのかを把握することにつながり、これらは復旧・復興事業においても重要なことであるといえる。

その復旧・復興事業は、その地域の風景をいかに維持、あるいは変更していくのかという問題でもある。例えば、自宅の再建のために解体工事をするようになった際に、玄関先に植えてあった一本の梅の木を家屋とともに瓦礫としてしまうのか、再建した家の庭に移植し残しておく

のかという判断をしなければならないかもしれない。あるいは公的な事業においても、例えば被災した広場の復旧工事をするようになった際に、もう少し広く広場を使用できるようにするために大きなクスノキを撤去してしまうのか、それとも地震に耐えた大きなクスノキという震災遺構として広場に残すのか、という判断をしなければならないかもしれない。このような判断に迫られた時こそ、個人の思いを見落とさずに反映させることが重要であると考えられる。

震災時に顕著に表れる個人の思いとはいかなるものであろうか。地震が発生する以前の生活においては考えることも、その大切さに気づくこともできなかった何気ない風景というものを、地震が発生したことによって失うことになる。失ったことで、初めて何気ない風景の価値を人々は認識するということは考えられる(図-1)。当たり前のようにあるものの存在は、それが傷つけられたり失われたりしない限り、大切さや尊さに気づきづらいものだが、地震によって無理やりにも気づかされるのである。さらに地震発生後は毎日が非常時となり、人々は生活環境もコミュニティ環境も日々目まぐるしく変化する状況下に置かれることになる。このように地震が発生し、日々変化する状況を目の当たりにし、それらを意識するからこそ、平時の何気ない風景の重要性を実感し、

地震が発生しなければ存在したはずの風景に、想いを馳せるきっかけとなるといえる。そのあったはずと捉える風景とは、存在していることが当たり前とされている風景である。その当たり前の風景が震災によって失われてしまった時、人々は変わり果ててしまった風景をどのように捉え、その風景から何を感じ取ったのかを考えることが、個人レベルにおける震災の捉え方を把握することにつながる。

以上をふまえ本研究は、震災をとおして人々がどのように風景を捉えているのかを考察することを目的とする。

(2) 本研究の位置づけ

俳句は基本的に自然を対象として詠まれる日本古来の伝統文芸の一つである。俳句というものには四季の移りゆく様や、環境の中でおこなわれる様々な営みなどに対して、人々がどのように心を動かされたのかという心理的要素も詠み込まれることが多い。つまり俳句は目に見えているものを単に描写する方法というものだけではなく、環境の中に自己を置くことによって生まれる感性、自己と環境の関係性を表現したものと捉えることができる。このような自己と自然という関係から見る俳句の捉え方は風景という言葉の捉え方に類似するといえる。この言葉について中村は「地に足を付けて立つ人間の視点から眺めた土地の姿」²⁾と定義している。さらに風景について、斎藤は目の環境の眺めに対する情緒的な賛意を前提としている場合がある³⁾と述べており、星野は景と人の関係が景観に比べ混然としており、光に照らされた環境の中に人がいることで成立するものだ⁴⁾と述べている。ここで先述の俳句について振り返ってみると、風景という「光に照らされた環境の中に人がいること」で成立する、「人間の視点から眺めた土地の姿」や「目の環境の眺めに対する情緒」を詠み込むことが俳句においての基本的な姿勢だといえる。俳句は風景を詠み込んだ文学作品といえることから、さまざまな風景を読み解く際に俳句を対象とした研究がなされている。

例えば山本⁵⁾は松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶の俳句や俳画に見られる心の原風景的イメージから、俳句や

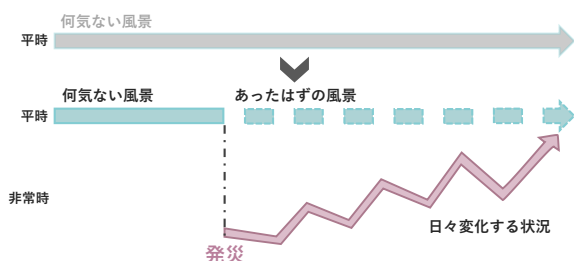


図-1 平時と非常時における風景の認識

俳諧の成立から展開、その意義と評価などに関して考察している。積田⁶⁾は俳句とそこに詠まれた心象風景のイメージの共通する内容と、その印象の心理的側面との関係性を探っている。また俳句のみを対象とてはいないが、吉村⁷⁾は俳句を含む文学作品である「おくのほそ道」を対象とし、その中にある風景の生成と更新の方法を抽出して構造を明らかにすることで風景を新しく解釈する方法を整理している。以上の論文では平時の風景を詠んだ句からさまざまな考察を展開しているが、平時以外、つまり非常時の風景について詠んだ句は扱われていない。前節でも述べたとおり、非常時においては平時に比べ、何気ない風景の価値がより顕在化されると言え、この非常時の俳句からも何か考察が得られるのではないかと考える。さらに以上の既往研究においては、すべて俳人による作品を対象としており、俳人によらない、一般市民が詠んだ作品を対象とした研究は見られない。そのため、俳句の専門家ではないような一般市民が風景をどう捉えて、俳句として表現しているのかについては明らかにされていない。

このような非常時の一例として、東日本大震災を挙げることができる。東日本大震災をテーマとした震災俳句についての研究は、太田⁸⁾によっておこなわれている。しかし、被災者となった俳人が詠んだ震災俳句を対象とし、取り上げている46の俳句を一句一句解説することにどまっており、全体をとおした考察や風景と関連付けた考察などはされていない。

一方、東日本大震災発生から5年後に熊本地方でも地震災害が発生した。この震災を受けくまもと・文学歴史館は、熊本地震をテーマにした震災文学作品を募集し、3,226もの作品を掲載した「平成28年熊本地震震災万葉集⁹⁾」（以下、震災万葉集）を発行した。その震災万葉集の中にはさまざまな種類の文学作品が掲載されているが、その中に俳句¹⁰⁾も含まれておりその数は652句である。このように震災関連の俳句をまとめた句集¹¹⁾は、東日本大震災が発生した後も発行されているが、掲載句は162句と震災万葉集に比べ少なく、同著者が出版している歌集¹²⁾も119首と掲載数が少ない。さらに両方の作品集に掲載されている作品は、全て著者である歌人の長谷川による作品である。これらを踏まえると多数の震災関連の文学作品をまとめており、名人・素人問わず多くの人から作品を募集して製作した書籍は、震災万葉集の他に見られなかった。

以上から本研究ではこの震災万葉集を対象書籍とし、特にその中の俳句を用いることで、何気ない暮らしや風景の価値が顕在化する発災後において、個人がどのように風景を捉えているのかについて考察していく。

2. 研究対象・手法

(1) 平成28年熊本地震震災万葉集

俳句を詠むためには、どのような対象をどのように詠むかということから始まる。俳句初学作法¹³⁾でも述べられているように、読者にとって俳句をどのように詠んでいるのかという表現に対してよりも、どのような対象を俳句に詠んでいるのかという題材自体に感情を動かされやすい。つまり詠み手にとって題材発見は俳句における重要な初手といえ、その発見のきっかけになるのが様々な自然に対して心を動かされることである。このような題材発見のためのきっかけがとなったのが、今回の熊本地震である。自然災害が発生したことによって心が動かされ、それをきっかけとして震災を題材に多くの句が詠まれている。

本研究の対象書籍である「平成28年熊本地震震災万葉集」は、くまもと文学・歴史館によって平成30年1月30日に発行されており、熊本地震がテーマの短歌、俳句、詩、川柳、肥後狂句、散文、随筆などの計3,226の文学作品が掲載されているものである。掲載作品については応募型(図-2)であり、応募資格は特になく熊本県内に限らず九州地方では長崎県、福岡県など、遠方では茨城県、岐阜県、大阪府などからも応募が寄せられている。応募方法はメール、ファックス、郵送の3種類を設け、応募期間は平成28年11月21日から平成29年3月17日までとしており、発災からおよそ1ヶ月間に作られた作品を対象



図-2 募集ポスター

としている。また、震災万葉集作成の趣旨は、天変地異を経験して非日常生活を送っているからこそ生まれてくる作品を、熊本地震の記憶として現代、後世に伝えるためとしている。

さらに詳細な情報を得るために、これらの活動を主としておこなっていた、くまもと・文学歴史館館長の服部英雄氏、学芸調査課参事の鶴本市郎氏に平成30年11月28日14:00～15:30でヒアリングをおこなった。主なヒアリング内容としては震災万葉集作成のきっかけについてである。館長の服部氏は、知人が震災を受けて詠んだ「地震あれど全山緑いざ生きむ」という句と出会い、このような震災関連作品を記録に残したかったと述べた。さらに、「くまもと文学・歴史館友の会」が平成28年6月23日に開催した「世話人会」に参加し、その会で参加者から様々な被災体験を聞き、本来であれば被災者の生の声として書籍にして残したいが、個人の体験談であるという点で困難だと判断したという。震災の体験談というデリケートな話題であるため、公開することで被災者の傷を抉ることになるのではないかと躊躇したためである。そこで被災体験者による、被災体験を通じて感じた思いなどを込めた文学作品として残すことを発案した。上記2点をきっかけに、非日常という追い詰められた時にしか出てこない人々の感情を、歴史的資料として残すことを決めた。様々な文芸作品が掲載されている震災万葉集のうち本研究では俳句(全652句)のみを対象とした。その理由としてまずは俳句のルールとして基本的に季節を表す季語が含まれているため、次期をある程度特定できることが挙げられる。また俳句の特徴である、どのような対象を俳句に詠んでいるのかという、題材自体に人は感情を動かされやすいことの2つの観点から本研究では震災万葉集に掲載されている俳句のみを対象として取り扱うこととする。

(2) 研究手法

まず初めに俳句の基礎情報を整理するために、652句の俳句の季語を抽出し、角川俳句大歳時記の春・夏・秋・冬・新年の全5巻^{14) 15) 16) 17) 18)}を基に、どの季節に属するかの調査をおこなう。ここで季語における季節とは単に春・夏・秋・冬ではなく、さらにその中に初、仲、晩の3つ、さらにそれら全てをさす全という4つの分類が追うことでどの時期に詠まれた句であるかを把握することが可能であるからである。次に使用できる文字数が17されている。例えば春だと初春、仲春、晩春、全春となる。1年を春・夏・秋・冬の4つに等分すると、それぞれ3ヶ月ごとに分類され、先述の初、仲、晩とは1ヶ月ごとに付いている名称であることが分かる。しかし季語が順ずる暦は旧暦であり、現在用いられている新暦とはおよそ1ヶ月のずれが生じているため、このずれを修正する

ことで新暦のいつを詠んだ句であるかを特定することができる。

それぞれにおいて俳句に含まれる季語の種類でさらにグループに分ける。ここで季語の種類は歳時記によって多少異なるが、今回は角川俳句大歳時記の分類である時候・天文・地理・生活・行事・動物・植物の7分類を採用する。ここまででおこなった定量的分析を基に、句の内容を詳細に読み解いていくことで風景論的考察をおこなう。

3. 季語の抽出と句の時期の特定

(1) 季語の抽出と詠まれた句の時期の特定

俳句は2章1節で述べたように、5・7・5の17文字で構成されるが、それに加え季語を用いることが基本的なルールとなっている。季語が担う役割として挙げられるのは季節を表現するというのももちろんであるが、季語を用いることで季感を通して対象を句に詠み込むということもまた役割の一つである²⁰⁾。しかし俳句の中には季語が用いられないものも存在する。本研究の対象である俳句にも季語が含まれない句があったが、季語が不明な句として扱うこととする。

まずは652句すべての句に対して季語の抽出をおこな

った。これは季語を抽出することでいつ詠まれた句なのか、またはいつを詠んだ句なのかを把握し、それによってどの時期の出来事や様子、心情が俳句に詠み込まれているのかを考察することを目的としている。収集する情報は、季語の表記、季語の読み、四季、季節、歳時記のページ番号の5つであり、さらに季節の特定後は旧暦を新暦に変換する。

また、四季・季節の分類を大分類(春, 夏, 秋, 冬, 新年, 不明)の四季、さらに小分類(初, 仲, 晩, 三)でまとめた結果を図-3で示し、さらに小分類がさす旧暦を新暦に変換した結果を表-1に示す。

(2) 時期における分類の考察

季語における句の内容についての詳細な考察は後の4章1節にて述べているため、ここでは時期における句の一般的傾向のみについて述べていく。まず春の句について例句を添えながら考察していく。春は発災から日が浅いこともあり震災を直接的に表現している句が多く、身の周りの出来事や目の前の状況を詠んだ句が多くみられた。例えば「春の地震闇を上下にゆさぶりぬ」といった地震発生直後の様子を詠んだ句や、「テント泊車中泊あり月おぼろ」といった自身の生活環境をそのまま詠んでいる句、また「炊き出しの無口の列にもんしろちょう」や「春光にタンクまぶしき給水車」といった目の前の状

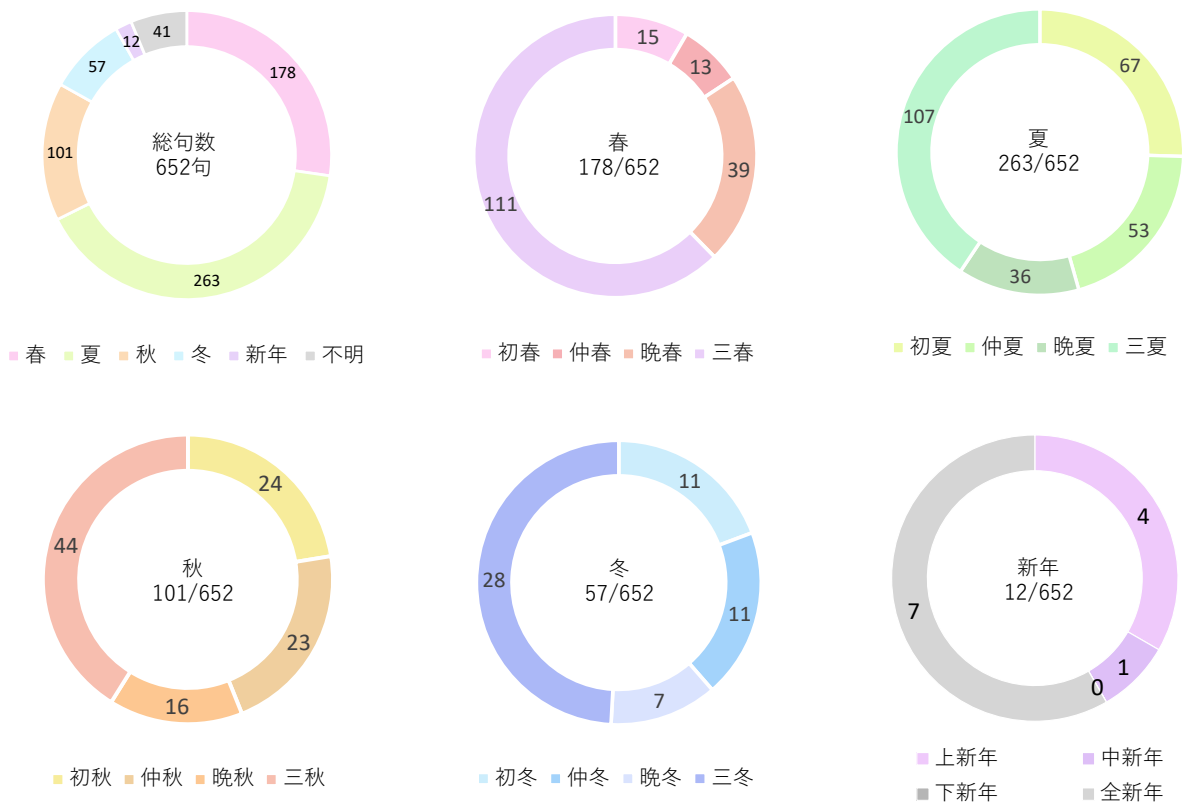


図-3 震災俳句における大分類(春, 夏, 秋, 冬, 新年, 不明)と小分類(初, 仲, 晩, 三)の結果

況を詠んだ句などが挙げられる。次に夏の句についても発災から数ヶ月しか経過していないため、春の句と類似する点もみられる一方で、地震直後からの復旧の様子を追うこともできる。例えば「避難所の六千人の梅雨晴間」といった避難所生活を詠んだ春の句と類似する句もある一方で、「青葉風インフラ解除でほっとした」といった復旧の様子を詠んだ句もみられた。このことから生活環境について大きな変化は見られないが、復旧作業が徐々に増えている時期であることがわかる。次に秋の句については発災から日が経ったからか、春と夏の句に比べると震災を直接的に表現している句は少なく、間接的な表現が多くみられた。また、身の周りのことよりもさらに広い視野で震災を詠んだ句が多くみられた。以上の特徴は冬の句についても同様であった。例えば「大割れの地底をのぞくすゝきかな」のように、地震という言葉を用いることなく地震を表現している句や、「震災を越えて今年も稲稔り」といった、震災後の環境を広い視野から詠んでいる前向きな句がみられた。

以上より、時期における俳句の考察としては、地震直後の春や夏の句は発災からまだ日が浅いため、震災を直接的に表現している句が多く、自身の周辺の出来事や状況を詠んだ句が多かった。夏の句に関しては復旧作業の

様子が読み取れる句も存在した。また秋と冬の句については発災からやや時間が経過しているため、間接的な表現が多く、さらに広い視野で震災を詠んだ句が多くみられた。

4. 季語分類

次に 652 句の俳句を複数のグループに分類するために、季語に着目し、分類をおこなっていく。角川俳句大歳時記では収録季語を時候・天文・地理・生活・行事・動物・植物の 7 つに分類しているため、本研究においてもこれらの分類を用いて詳細な季語分類をおこなった。7 つの項目ごとの特徴について、例句を添えながら考察をしていく。

(1) 季語分類

a) 時候について

「秋暑し公費解体打ち合はす」という句を取り上げる。季語が「秋暑し」という初秋の句であり、これに続く「公費解体打ち合はす」という出来事が初秋の頃にあったということ記録的に詠んでいる句であることがわかる。地震が発生し数ヶ月が過ぎた初秋によく公費解体の打ち合わせをしているという状況を考えると、安堵と不安や焦燥などが混在した複雑な心境が読み取れ、日々の避難生活において多くの人が抱いたことのある感情ではないだろうか。また、「ずたずたの町よ生活よ春寒し」という句を見ると、季語が「春寒し」という初春の句であり、地震によって壊されてしまった町や自身の生活の状況を詠んだ句である。「ずたずたの」という表記から、甚大な被害があったことが連想され、「町よ」や「生活よ」といった表現から作者の悲しみの心情が読み取れる。

このように、時候の季語は時期を示すために用いられており、記録的要素が強いといえる。

b) 天文について

「五月闇活断層犇きぬ」という句を見ると、季語が「五月闇」という仲夏の句である。梅雨の頃の真っ暗な夜に活断層がひしめき合っているかのような地震の様子を詠んだ句である。発災から数ヶ月経過しても未だ発生する夜の地震に対する恐怖感や不安感が詠まれており、その感情から休めない日々が続いた人も少なくないだろう。また、「にぎり飯配る人あり朧月」という句を見ると、季語が「朧月」という春全般の句であり、にぎり飯の配給がおこなわれていたという経験を詠んだ句である。作者が感じているにぎり飯を食べることができる感謝や、それを配給してくれるに対する感謝などを読み取ることができる。

表-1 旧暦から新暦への変換とそれぞれに属する句数

		旧暦(月)	新暦(月)	句数(句)	
春	初春	1	2	15	178
	仲春	2	3	13	
	晩春	3	4	39	
	三春	1~3	2~4	111	
夏	初夏	4	5	67	263
	仲夏	5	6	53	
	晩夏	6	7	36	
	三夏	4~6	5~7	107	
秋	初秋	7	8	24	101
	仲秋	8	9	23	
	晩秋	9	10	16	
	三秋	7~9	8~10	44	
冬	初冬	10	11	11	57
	仲冬	11	12	11	
	晩冬	12	1	7	
	三冬	10~12	11~1	28	
新年	上新年	1	1	4	12
	中新年			1	
	下新年			0	
	全新年			7	
不明	不明				41

このように天文の季語は、空の様子や天候などが用いられているという特徴はありながらも時候と同様、時期を示すために用いられており、記録的要素が強いといえる。

c) 生活について

「振動や切炬燵にてかばいたり」という句を取り上げる。季語が「炬燵」という冬全般の句であり、地震が発生したため身を守ったという出来事が冬にあったということ詠んでいる句である。まさか身の危険を感じるほどの余震がまだ襲ってくるなんてという驚きと、地震に対する恐怖感を読み取ることができる。また、「めぐりくる禍福の波や秋起し」という句を見ると、季語が「秋起し」で秋全般の句であり、被災したり、そのことで誰かに助けってもらったりという禍福が震災時は何度も繰り返されるという状況を詠んだ句である。被災時は悲嘆や随喜などの感情が入交り混乱しながらも、乗り越えていこうとする作者の心情が読み取れ、このような感情は多くの人が感じていたのではないだろうか。

このように生活の季語は、身近な生活の物、また季節物が用いられているため、時候、天文に比べて身近な出来事や状況を詠んでいるという特徴はあるが、あくまで時期を示すために季語が用いられており、記録的要素が強いといえる。

d) 行事について

「聖樹に灯点して仮設の老ふたり」という句を見ると、季語が「聖樹」で仲冬の句であり、「聖樹に灯点して」という表現からクリスマスツリーであることがわかる。仮設住宅で迎えるクリスマスではあったが、ツリーを点灯しクリスマスを祝ったという経験が詠まれている。その経験に対して、仮設で迎えたという点で若干の悲しさが表れているとも捉えられるが、今年も無事クリスマスを祝うことができた喜びも含まれている句であるといえる。このように、発災前は当たり前に行っていたことができる喜び、非日常の中に存在する日常のありがたさを感じた人も多くいたであろう。また、「墓銘碑も倒れしままに盆の入り」という句を見てみると、季語が「盆」の初秋の句であり、盆の季節になったにもかかわらず墓銘碑が倒れたままになっているという状況を詠んだ句である。墓銘碑の修復まで至っていないことに対する作者の罪悪感を読み取ることができる。

このように行事の季語は、そもそも行事が時候に合わせておこなわれるものであるため、生活と類似する身近な経験や状況を詠んでいるという特徴はあるが、あくまで時期を示すために季語が用いられており、記録的要素が強いといえる。

e) 地理について

「ふるさととは祈りに満ちて秋の声」という句を見ると、季語が「秋の声」で秋全般の句であり、復興を祈る人々

の声や思いが満ちている様子を詠んでいる。この句の「祈り」には作者の復興に対する思いも込められているのであろう。しかしこの句においても季語は主語として詠まれていない。一方で、「震災をかなたにやりし青田かな」という句を見ると、季語が「青田」という晩夏の句であり、震災を忘れさせるほどの力強さというものを、青田を主語に詠んだ句である。地震の被害をものともせず、青々と元気な姿を見せる田の強さに救われた作者の心情が読み取れる。天災を受けた自然の力強さというものは被災者のみならず、多くの人が感じたことではないだろうか。

このように地理の季語は、記録的要素の強い句も存在するが、季語を主語として詠むことで句も記録以外の表現をおこなっていくということがわかった。

f) 植物について

「震災のボランティア植ゆる藜を掘り」という句を見ると、季語が「藜」で秋全般の句であり、作者はこの藜を掘りながら、ボランティアの人たちとの記憶を思い起こしていることが想像できる。また、「傷あるは城の勳章冬紅葉」では、季語が「冬紅葉」で初冬の句であり、地震によってできた城の傷を前向きに捉えて詠んでいる句であるといえる。地震の傷あとも城の強さを示す勳章になると、城に対する作者の誇らしさを読み取ることができる。しかしこの句における主語は傷がある「城」であり、季語である「冬紅葉」は主語として詠まれていないことがわかる。

一方、「新緑の包みきれない地震の傷」という句を取り上げる。季語が「新緑」という初夏の句であり、「地震の傷」を「包みきれない」のは「新緑」であることが読み取れる。新緑という生き生きとした植物でさえ、包みきることができなかった地震の脅威を詠み込んだ句であるといえる。前項では強さとして詠まれていた自然だが、この句ではその自然さえ敵わない事実を詠んでおり、人々はより深い悲しみや恐怖を感じたであろう。また、「たんぼぼの祭のさ迷ふ地震の空」という句を見てみると、季語が「たんぼぼ」という春全般の句であり、たんぼぼの綿毛が被災地の空を舞っている様子を詠んだ句である。この句における主語は空を舞っている「たんぼぼ」であることがわかり、舞う様子を「さ迷ふ」と表現していることから、たんぼぼの綿毛に行き場のない自身を投影しているという解釈ができる。

これらの4句を見てみると、用いられている季語の役割に違いがあることがわかった。「震災のボランティア植ゆる藜を掘り」や「傷あるは城の勳章冬紅葉」は季語が単に時期を示すために用いられているといえるが、「新緑の包みきれない地震の傷」や「たんぼぼの祭のさ迷ふ地震の空」は季語である「新緑」や「たんぼぼ」が句の主語となっているといえ、句の中で季語が重要な役

割を担っていることといえる。

このように植物と季語とした句は地理と同様に、記録的要素の強い句と、季語を主語として詠んだ、記録以上の句が存在することがわかった。

g) 動物について

「鳥渡る小さき更地となりにけり」という句を見ると、季語が「鳥渡る」で仲秋、晩秋の句であるが、この句における主語は季語である「鳥渡る」ではなく、更地となってしまったその場所であるといえる。作者の思い入れのある場所、おそらくはかつての住まいが建っていた場所が、解体され更地になり思っていたよりも小さな場所であることを自覚した瞬間を詠んだ句であると考えられる。その空しさや悲しさを表すように、頭上を鳥が渡っているという言葉を用いて表現している。また、「城垣の崩れくづれて鳥雲に」という句を見ると、季語が「鳥雲に」という仲春の句であり、城の石垣が崩れてしまっている様子を詠んだ句である。「崩れくづれて」と重ねて詠んでいることから石垣の被害の大きさがうかがえ、その被災の様子を憂いている作者の心情も読み取ることができる。しかしこの句における主語は季語である「鳥雲に」ではなく崩れてしまった石垣であるといえる。

一方で「避難所に舞ひ込む蝶の落ち着かず」という句を取り上げる。季語が「蝶」という春全般の句であり、避難所に舞い込んで落ち着かない様子でいるのは、季語である「蝶」だと読み取ることができ、主語であるといえる。また、蝶が避難所にいる様子を単に表しているわけではなく、避難所にいて落ち着かない作者自身の様子を蝶に投影して詠んでいると捉えることができる。実際、プライバシーも守られにくい状況の中、他人と暮らすというのは落ち着かず、不安な日々であっただろう。また、「地震など無かったやうな寒鴉」という句を見てみると、季語が「寒鴉」という晩冬の句である。この句における主語は「地震」をもものともせずにいる「寒鴉」であり、「寒鴉」の力強さを詠んだ句であるといえる。

このように動物を季語とした句も、地理や植物と同様の傾向があることがわかった。

(2) 季語分類における総括

季語の分類ごとの句数をまとめたものを表-2にて示す。季語という観点から句を考察してみると、時候、天文、生活、行事、地理、植物、動物のすべての分類に関して、その時の経験や状況を詠んでおり、それらがいつのことであるかについて季語を用いて記録的に詠んでいる「記録的震災俳句」である。この句が詠まれるまでのプロセスを構造化したものを図-4に示す。記録的震災俳句には大きく分けて2パターンあり、一つは作者が震災の状況を風景として捉えているパターンである。これは震災状況を主語として詠んでおり、作者が見たものをそのまま

表現しているといえる。もう一つは作者が自分の震災経験を風景として捉えているパターンであり、これは作者自身を主語として詠んでおり、作者が経験したことをそのまま表現しているといえる。また地理、植物、動物に分類された句は2種類に分けられ、一つは先述の記録的震災俳句である。例えば記録的要素が強いと考察した、「ふるさは祈りに満ちて秋の声」(同章1節e項)、「震災のボランティア植ゆる藜を掘り」(同章1節f項)、「鳥渡る小さき更地となりにけり」(同章1節g項)などの句がこの分類に属する。もう一つは、「震災をかなたにやりし青田かな」(同章1節e項)、「新緑の包みきれない地震の傷」(同章1節f項)、「何事もなかったようにつつじ咲く」(同章1節f項)、「地震など無かったやうな寒鴉」(同章1節g項)という句のように、季語を地震と対比させているものや、「たんぽぽの絮のさ迷ふ地震の空」(同章1節f項)、「避難所に舞ひ込む蝶の落ち着かず」(同章1節g項)という句のように作者自身を季語に投影しているものがみられた。このような句を「比喩的震災俳句」とする。記録的震災俳句と比喩的震災俳句の句数をまとめたものを表-3にて示す。

記録的震災俳句については季語はあくまで時期を示すためにとどまっているため、3章2節で述べた時期における俳句の考察と同様となる。地震直後の春や夏の句は発災からまだ日が浅いため、震災を直接的に表現している句が多く、秋と冬の句については発災からやや時間が

表-2 季語分類における句数

	時候	天文	生活	行事	地理	植物	動物	不明	計
句数	173	116	56	10	19	171	70	37	
計									652
	記録					比喩			

俳句が詠まれるまでのプロセス

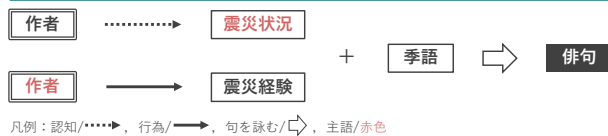


図-4 記録的震災俳句が詠まれるまでのプロセス

表-3 比喩的震災俳句の句数

	対比的 震災俳句	投影的 震災俳句	比喩的 震災俳句	計
句数	50	19	69	
計				138

経過しているため、間接的な表現が多かった。したがって、季語の役割が時期を特定するだけでなく、作者自身の投影対象としてや、地震と対比させる対象として詠まれている比喩的震災俳句については次章にてさらに考察していく。

5. 比喩的震災俳句の考察

本章では比喩的震災俳句を対象として考察をしていく。まず4章2節で述べたように比喩的震災俳句には、季語と地震を対比させている句や、作者自身を季語に投影している句がみられた。そこで本稿では前者を「対比的震災俳句」、後者を「投影的震災俳句」と称して考察をおこなっていく。

(1) 対比的震災俳句と投影的震災俳句の相違点

対比的震災俳句について「夏草の覆ひ尽せぬ地震の跡」という句を取り上げると、季語が「夏草」で夏全般の句である。4章1節で述べた通り、「夏草」が主語となっている句であるが、その主語を作者などの個人に置き換えることはできないと考える。「夏草」であれば地震の傷あとを覆うことは想像できるが、地震の傷あとのような広域なものを覆うことは個人が体験し得ないことであるといえる。一方、投影的震災俳句について「瓦礫より町を窺ふ蜥蜴かな」という句を取り上げると、季語が「蜥蜴」で夏全般の句であるが、主語の「蜥蜴」を個人に置き換えても句として成立することがわかる。個人が瓦礫から町を窺うという行為が実際されていたかどうかは判断できないが、物陰から何かを窺うという行為自体は個人が体験し得ることであるといえる。つまり町を窺っている「蜥蜴」に自身を投影することが可能なのである。

このことから対比的震災俳句と投影的震災俳句の特徴を比べると、季語が主語になっている点は同様であるが、主語の置き換えが可能かどうかという点において相違点があるといえる。

(2) 対比的震災俳句について

まず対比的震災俳句について詳述していく。どういう対象物が対比表現を用いて詠み込まれているのかについて、4章1節で述べたように植物、動物やもう少し広域な地理、地形的なものや地震やその被害が対比として詠まれており、対比的表現は俳句ではよく用いられる方法である対比する2つの物または事柄を異色の物として取り扱うというものである²⁾。

では震災万葉集に掲載されている対比的震災俳句においては、対象物をどのように対比しているのかについて

述べていく。対象物である地理、植物、動物が句においてどのように詠まれているのかを見てみると、「しかしすがに地震の荒野に泉湧く」や「大地震の崩れもよそに楠若葉」、「地震など無かつたやうな寒鴉」のように地震に対する対象物の強さを詠んでいる句と、「地震の傷覆ひてをりぬ葛の花」や「冬芽立つ地震にかたむく一樹にも」のように地震の強さを対象物を用いて詠んでいる句の2種類がある。まず前者の地震に対する対象物の強さを詠んでいる句については、自然という対象物が持つ持続性や周期性がテーマとなっているといえる。草木や花といった植物、また昆虫や鳥といった動物の普遍的な営みや活動から生まれる持続性や周期性という、変わらずあり続けていることが、地震が発生したことにより顕著になったことで詠まれたといえる。持続性や周期性といった対象物の力強さを人間が再確認し、それに比べその裏にある作者、もとい人間のはかなさを詠み込んでいるといえる。また一方で、震災によって変わっていく生活の様子と、自然のしたたか度で変わらない様の対比が詠まれていると考えられる。つまり自然のしたたかさとそれをも凌駕する地震の強さの対比が詠まれているともいえる。これは今回の熊本地震の強さを物語っているともいえ、震災万葉集の特徴であるとも考えられる。

以上をふまえ、対比的震災俳句が詠まれるまでのプロセスを構造化したものを図-5に示す。記録的震災俳句では作者が震災状況を風景として捉えていたのに対し、対比的震災俳句では作者が震災状況の中に見える季語を風景として捉えているといえる。これは季語を主語として詠んでおり、単に状況を詠むだけでなくそこに作者自身が見出した自然の強さ、または地震の強さを詠み込んでいるといえる。

(3) 投影的震災俳句について

次に投影的震災俳句について詳述していく。何かの対象物に自身を投影して詠むということは俳句でもよく用いられる方法の一つであり、対象物の姿かたちや様子を俳句に写すのと同時に、その作者の心持を写すというものである²⁾。

次にどういう対象物が投影的に詠み込まれているのかについて、作者が自身を投影しているため、対比的震災俳句よりも小さいヒューマンスケールに近いものを対象としているといえる。季語の項目においては「病葉や目を閉じてゐる地震疲れ」といった植物や、「ほととぎす

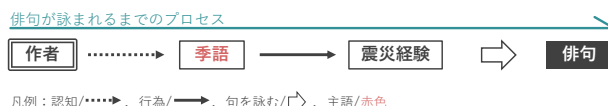


図-5 対比的震災俳句が詠まれるまでのプロセス

地震に痩せにけり」といった動物などは対象として詠まれているが、地理については対象となっていない。このような対象が、なぜ震災俳句として詠み込まれているのかについて以下に述べる。

風景の見方について星野は「私たちは、仮想の分身によって、風景を使うように眺める」²⁹と述べている。人々は生活する中において、どのような空間ではどのような行動が推測されるかを習得している。これは目の前の様々な風景に自身を投影することで、その風景の中で考え得る行動を仮想にて体験していることだといえ、このような風景の捉え方が「仮想行動」と呼ばれている。これと同様なことが投影的震災俳句においてもなされていると考えられる。作者が震災経験や記憶などを持って生活を送っている中、周辺に生えている植物や目の前に現れた動物などがふと目に留まったことがきっかけとなり、心の中に持っていた震災に関する経験や記憶が俳句として詠まれているのではないかと考えられる。1章3節で述べたように「目前の環境の眺めに対する情緒」などを詠み込むことが俳句においての基本的な姿勢だとすると、地震が発生したことで、蝶が飛んでいる様子や、たんぼぼの綿毛が空を舞う様子を強く認識することで、自分自身が日常よりも強く環境と関わりを持ち、風景として捉えることとなったと考えられる。平時であれば何気なく見過ごしてしまうような、小さな草花や昆虫などに目を向けたことが、周辺環境と自身に関係を持つきっかけとなっているといえる。また、用いられている季語が比較的小さなものであり、季語に対して自身を投影しているためヒューマンスケールに近いものを対象としていると考えられる。

以上をふまえ、投影的震災俳句が詠まれるまでのプロセスを構造化したものを図-6に示す。記録的震災俳句では震災経験を風景として捉えていたのに対し、作者が季語をとおして震災経験を風景として捉えているといえる。これは季語を主語として詠んでおり、単に経験を詠むのではなく、植物や動物などの境遇に自分の経験を重ねて句として詠んでいるといえる。

(4) 比喩的震災俳句における総括

以上より、比喩的震災俳句についてまとめる。対比的震災俳句においては、震災が発生したことで変わってしまった生活の様子と、自然のしたたかで変わらない様の対比が詠まれる一方、変わらない存在として詠まれるものでさえ変えてしまう、地震の恐ろしさを表現した句も



図-6 投影的震災俳句が詠まれるまでのプロセス

みられた。また投影的震災俳句においては、対象物である季語がふと目に留まったことがきっかけとなり、その対象物の境遇に自分の経験を重ねて俳句として詠まっていた。比喩表現を用いることで、単に震災の状況や経験を風景として句に表現するのではなく、作者自身がより風景の中に介入して句に表現しているといえる。対比的震災俳句では、作者が震災の状況の中に季語となる対象物を発見し、その対象物を周辺の状況と対比する行為をおこなっている。投影的震災俳句では、作者が境遇の似ている対象物となる季語を発見したことをきっかけとして自身を季語に投影するという行為により、季語の様子を通して詠み手自身の経験を表現している。

このように比喩表現を用いることによって、句をより深く考察することができた。地震にさえも強く耐える自然を句に詠み込むということは、人々が地震を受容しようとしているということであるともいえる。変わらないでいてくれる風景があるからこそ、震災によって変わってしまった生活環境などを受け入れることができているのではないかと考えられる。また、変わらないということが、失われて初めて気づいた、変わらない風景の大切さや尊さが俳句に詠み込まれている。また、対象物に自身の経験を詠み込むということについても、俳句にすること自体が、追い詰められた状況にある作者の心の整理をつけることにもつながっているといえる。

6. 震災俳句から見た風景の捉え方の考察・展望

以上をふまえ、風景の捉え方を震災俳句から考察していく。まず4章2節と5章2、3節で述べた考察より、人々が何を風景として俳句に詠み込んでいるのかという点に関して、「震災状況」と「震災経験」の2つが風景として捉えられていることが明らかとなった。またそれらを俳句に詠み込む際の表現方法として、「直接的」に詠んでいるか「媒介的」に詠んでいるかという違いがあることがわかった。これを「震災状況」か「震災経験」という軸と、「直接的」か「媒介的」という軸の2つを設けてこれに、記録的震災俳句、対比的震災俳句、投影的震災俳句が詠まれるまでのプロセスの構造化した図-4、図-5、図-6を当てはめて考察する。これを基に考察を進める。

まず、震災状況を直接的に表現している俳句については、作者が認知した震災の状況をそのまま風景として捉えているといえる。一方で震災状況を媒介的に詠んでいる対比的震災俳句は、目前に広がるものの中に対象物となる季語を作者が認知し、その季語と震災状況を対比することで風景として捉えているといえる。また、震災経験を直接的に表現している句は、作者が経験した出来

事そのものを風景として捉えているといえ、直接的に震災状況を詠んでいる句よりも、より風景の中に自身が入り込んでいるといえる。最後に、震災経験を媒介的に表現している投影的震災俳句は、対比的震災俳句と同様に、まず作者が対象となる季語を認知しているといえる。しかし、投影的震災俳句ではさらにその季語の境遇に対して自身を重ね、そこに自身の経験を映し込むことで風景として捉えているといえる。以上の考察をまとめたものを図-7に示す。

また本研究の展望として以下の2点を挙げる。1点目は対象である震災万葉集に掲載されている震災俳句のみの考察にとどまっていることである。他の震災俳句でも同様のことがいえるのか、またそれらの考察が一般的な俳句とは異なり、震災俳句の特徴であるのかの検証ができていない。そのため、震災をテーマとして詠まれている俳句についても取り上げて考察することが必要であるといえる。2点目は今回考察を深めていく上で心理学的要素が含まれていることがわかったため、新たに心理学的な観点からの考察も必要であるといえる。

7. おわりに

本研究では、震災をとおして人々がどのように風景を捉えているのかについて示した。

3章においては、どの時期の出来事や心情が俳句に詠み込まれているかを考察するために季語を抽出することで、いつ詠まれた句か、またはいつを詠んだ句かを把握した。地震直後の春や夏の句は発災からまだ日が浅いため震災を直接的に表現しており、身近な出来事や状況を詠んだ句が多かった。また秋と冬の句については発災からやや時間が経過しているため、間接的な表現が多くさらに広い視野で震災を詠んだ句が多かったことがわかった。

4章においては652句の震災俳句を季語の観点から俳句

を時候・天文・地理・生活・行事・動物・植物の7つの項目に分類し考察した。その結果、記録的震災俳句と比喩的震災俳句の2つに分類できることが把握された。

5章においては比喩的震災俳句がさらに対比的震災俳句と投影的震災俳句に分類されることがわかった。それぞれを深く読解し、変わらない風景があるからこそ、震災によって変わってしまったものを受け入れることができていくということがわかった。また、俳句にすること自体が、追い詰められた状況にある作者の心の整理をつけることにもつながっていることが示された。

6章においては以上をふまえ、風景の捉え方を震災俳句から考察した。震災俳句が「震災状況」と「震災経験」、「直接的」と「媒介的」という軸で4つに分類されることがわかった。それぞれに分類される震災俳句から見た風景の捉え方は、作者が認知した震災の状況をそのまま風景として捉えているもの、震災の中にある季語となる対象を作者が認知し、季語と周辺状況の対比関係を風景として捉えているもの、作者が経験した出来事そのものを風景として捉えているもの、作者が認知した季語に入り込み、さらにそこに自分の経験を映し込むことで風景として捉えているものがあることが把握された。

参考文献

- 1) 気象庁 HP：平成28年(2016年)熊本地震の関連情報、
〈https://www.jma.go.jp/jma/menu/h28_kumamoto_jishin_menu.html〉(2019.02.04.参照)
- 2) 中村良夫：風景学入門，pp.28，中公新書，1982.5.25.
- 3) 篠原修編・景観デザイン研究会著：景観用語辞典，pp.10-13，彰国社，1998.11.10.
- 4) 小林一郎監修・風景デザイン研究会著：風景のとらえ方・つくり方，pp.4-7，共立出版，2008.11.11.
- 5) 山本健一：心の原風景—俳句と俳画の世界—，岐阜市立女子短期大学研究紀要，第62輯，2013.3.
- 6) 積田洋，竹内政裕，鈴木弘樹：俳句から連想する心象風景の構成と心理的評価の研究，日本建築学会計画論文集，第76巻，第669号，pp.2093-2099，

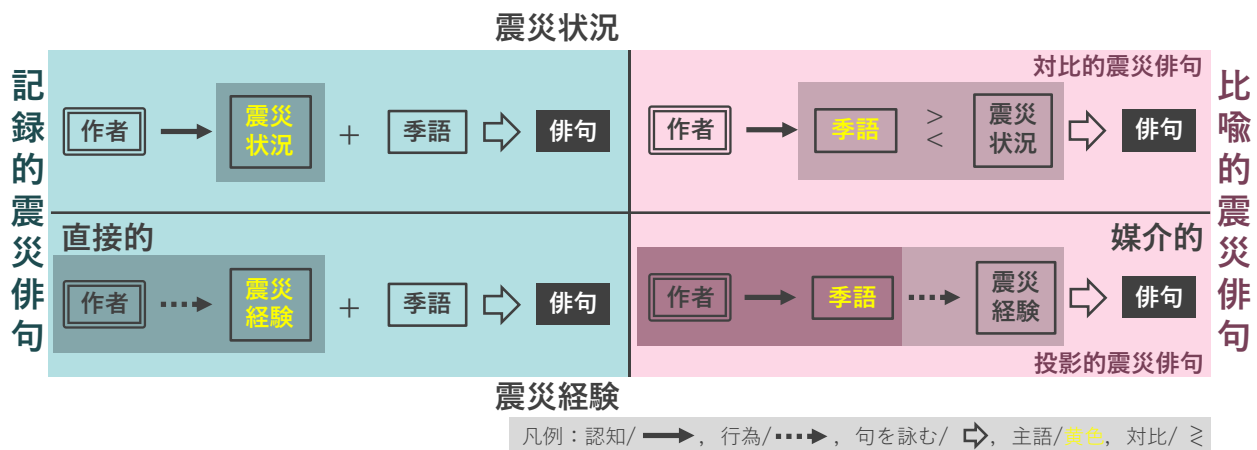


図-7 震災俳句から見る風景の捉え方

2011.11.

- 7) 吉村昌子, マンドレア・ヤニッキー, 橋本健一, 中村良夫: 「おくのほそ道」における風景の動的生成手法に関する研究, ランドスケープ研究, 日本造園学会研究発表論文集, Vol.60, pp.567-572, 1997.
- 8) 太田かほり: 震災俳句の可能性, 文京学院大学人間部研究紀要, Vol.15, pp.315-332, 2014.3.
- 9) くまもと・文学歴史館編: 平成 28 年熊本地震震災万葉集, 花書院, 2018.1.30.
- 10) 前掲 9), pp.2-32.
- 11) 長谷川權: 震災句集, 中央公論新社, 2012.1.25.
- 12) 長谷川權: 震災歌集, 中央公論新社, 2011.4.
- 13) 後藤比奈夫: 俳句初学作法, pp.25-28, 角川書店, 1979.9.30.
- 14) 青木誠一郎発行: 角川俳句大歳時記「春」, 株式会社角川学芸出版, 2006.11.30.
- 15) 青木誠一郎発行: 角川俳句大歳時記「夏」, 株式会社角川学芸出版, 2006.11.30.
- 16) 青木誠一郎発行: 角川俳句大歳時記「秋」, 株式会社角川学芸出版, 2006.11.30.
- 17) 青木誠一郎発行: 角川俳句大歳時記「冬」, 株式会社角川学芸出版, 2006.11.30.
- 18) 青木誠一郎発行: 角川俳句大歳時記「新年」, 株式会社角川学芸出版, 2006.11.30.
- 19) 樋口耕一: 社会調査のための軽量テキスト分析ー内容分析の継承と発展を目指してー, 前段, ナカニシヤ出版, 2014.1.20.
- 20) 鷹羽狩行: NHK 俳句入門鷹羽狩行俳句の楽しみ, pp.16-17, 日本放送出版協会, 1987.11.20.
- 21) 前掲 13), pp.81-84.
- 22) 高浜虚子: 俳句への道, 岩波書店, 1955.1.20.
- 23) 前掲 4), pp.24-27.

(2019.9.8 受付)